

News IR

IR（Institutional Research/インスティテューショナル・リサーチ）は、大学組織において何らかの決定を行う際に、それをサポートするための情報収集と分析を意味します。

二松学舎大学では、大学の機関活動に関するデータ収集・分析を行い、大学がどのような課題を抱えているのか、その課題はどのような要因と関連しているのか、今後どのような意思決定を取り得るのか等を客観的に把握し、政策形成・意思決定を支援するための活動を行っています。

2022年度 1号 (NO.13)

Contents

◆ PROGテストの実施について	1
◆ 二松学舎憲章	4

◆PROGテストの実施について

本学では、2017年度から、1・3年次生を対象として、大卒者として社会に求められる汎用的な能力・態度・思考（以下、ジェネリックスキル）の育成を目的に、「リテラシー」と「コンピテンシー」の両面から測定するツール【PROGテスト】を導入して実施しています。

2021年度は、4月12日（月）～5月9日（日）にかけて、1年次・3年次を対象としてweb形式で実施しました。

学部	学年	受験者（受験率）	在籍者数
文	1年	355名（74.4%）	477名
国際政治経済	1年	169名（69.9%）	245名
文	3年	295名（62.1%）	475名
国際政治経済	3年	152名（58.5%）	260名
合計		971名（66.6%）	1,457名

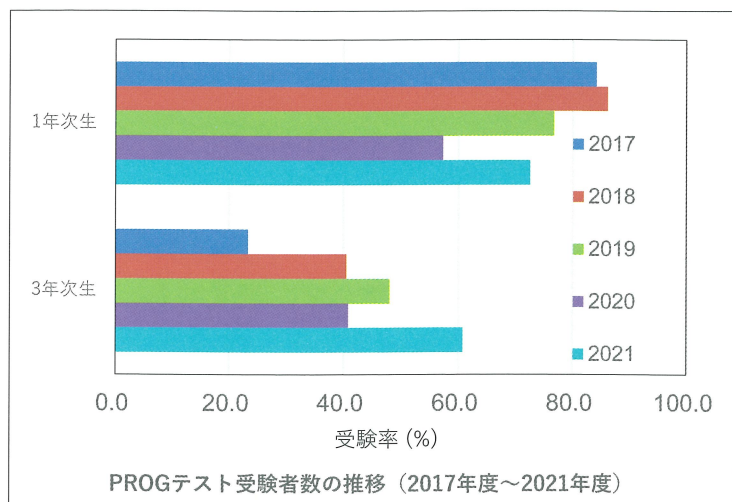
リテラシーとは、知識を活用して実践的な問題を解決する力を意味します。PROGでは、設定された状況や文脈の中で、文章や資料を読解したり計算したりするように工夫されており、自らの経験を活かした解釈や判断が問われる問題となっています。

コンピテンシーとは、自分を取り巻く環境に働きかけ、実践的に対処する力です。PROGでは、実社会で活躍する若手リーダー層の行動特性のデータと比較することで、実社会で通用する「周囲に働きかけ対処する力」を計測するよう設計されています。

学生の手元に届くPROGの個人結果報告書は、数値結果とイメージグラフィックで可視化され、学生が読みやすいよう、かつ自己理解を深められるように記載されています。

●PROGテスト導入から現在までの受験者数の推移

▼2017年度から導入された『PROGテスト』は、2021年度で5年目を迎えました。



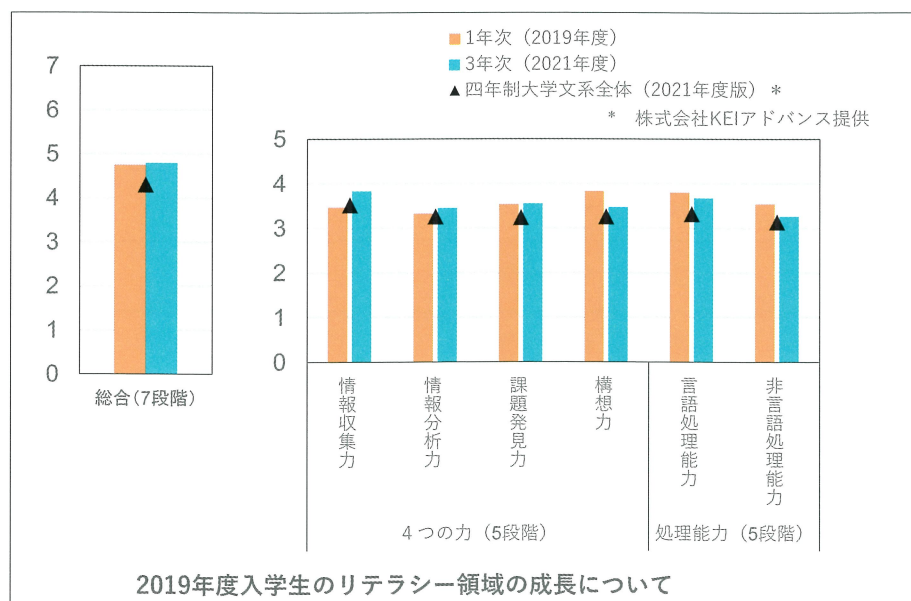
※表中の○数字は学年を表す

		受験年度				
		2017	2018	2019	2020	2021
入学年度	2017	①		③		
	2018		①		③	
	2019			①		③
	2020				①	
	2021					①

- 左図は、2017年度から2021年度までの受験率の推移を表しています。
- 2019年度までは対面による会場実施で高い受験率を得ていました。2020年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策のため、それ以前の実施方式だった紙ベースのテストをweb形式に切り替え、受験時期を変更するなどして対応しました。それ以降web形式でのテストを実施、受験率も回復傾向にあります。
- 社会人基礎力あるいは学士力とも呼ばれる『ジェネリックスキル』を測定するツール『PROGテスト』を多くの学生に受験してもらい、大学での学びや就職活動、また卒業後の活躍の気づきとして活用してほしいと考えています。
- 右図は、1年次から3年次で強化されたリテラシーとコンピテンシーの個別能力について、比較分析できる学年を示しています。今号では、2019年度に入学し2021年度に3年次生となった学生についての分析を以下にご報告します。

●2019年度入学生の1年次の時点と3年次の時点とで同一受験者の結果を比較し、リテラシーの成長を確認しました。

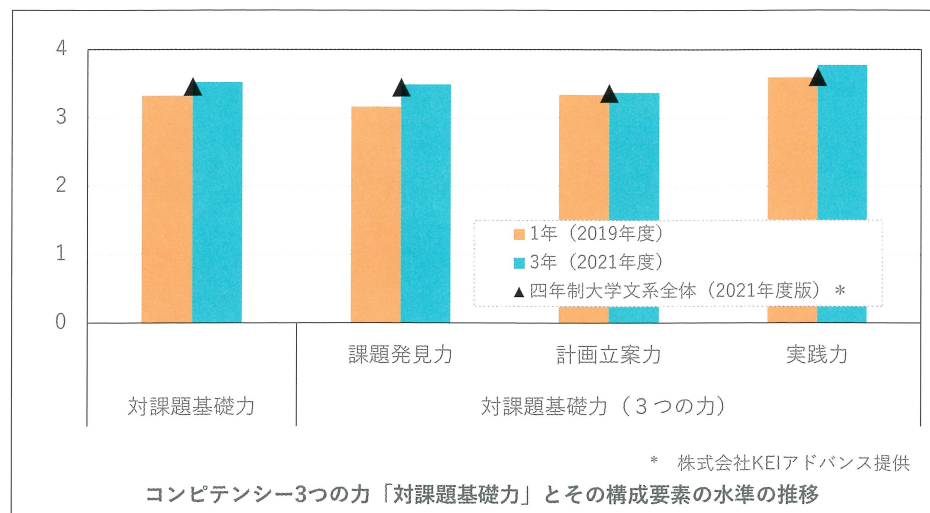
▼2019年度入学生の1年次～3年次のリテラシー領域の成長推移



リテラシー領域は、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」から構成される『4つの力』と「言語処理能力」「非言語処理能力」で構成される『処理能力』で測定されます。それらは、「知識を活用して問題を解決するチカラ」を指しています。

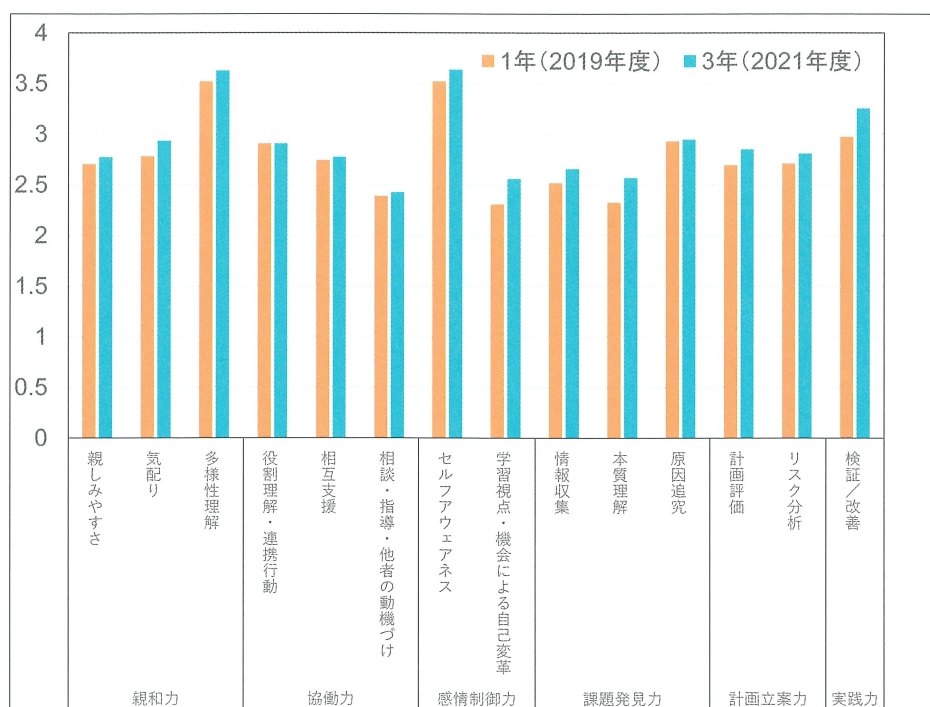
- 2019年度入学生では、リテラシー（総合）の成長がみられました。リテラシー領域の構成要素である「4つの力」のうち、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」でも成長がみられました。リテラシー領域の各要素の向上は、本学の人材育成の方針に掲げる「⑦自ら課題や問題点を発見・分析し、その課題を他者と協働して改善・解決に結びつけることができる人材」に関係するものであり、教育成果とも言えます。
- リテラシーは問題解決のプロセスで育つ能力といわれており、1年次の少人数の初年次教育においてアカデミックスキルを身につける授業や演習などを通じて、それらの能力を養い、他の授業を通じて知識の習得と活用を意識しながら問題（課題）解決を繰り返すことで能力が強化されたと考えられます。
- ただし、言語処理能力、非言語処理能力が3年次生の段階で伸びていない部分については、今後の課題です。

▼2019年度入学生の1年次～3年次のコンピテンシー（3つの力とその構成要素）の成長推移



1年次と3年次でのPROGテストをいずれも受験した学生の成長度合をグラフ化しました。コンピテンシー領域では、3つの構成要素のうちの1つ「対課題基礎力」が成長し、その構成要素をさらに分解した「課題発見力」「計画立案力」「実践力」にそれぞれ成長がみられました。四年制文系大学全体の平均と比較して同等の成長といえます。

▼コンピテンシー（33の詳細要素）について



- さらにコンピテンシーを33の要素に分解した項目で、本学の学生の強みを分析したところ、図のような要素に成長傾向がみられました。
- 認知心理学等の研究者の調査によれば、日本企業が求める人材像を日経225企業のHPからPROGテストの各コンピテンシーに関する単語の出現率が最も高かったのは「行動持続力」であったが、他に「親和力」「協調力」「実践力」などが30%以上の出現率だったと述べており、次に「課題発見力」「計画立案力」と続くと報告しています。
- 例えば、「親和力」は「多様な考えを受け入れ、相手の立場に立って考えることで信頼を引き出し人間関係を構築していく、また自ら多くの人と積極的に人間関係を築いていくチカラ」とされ、本学学生は、二松学舎大学での学びを生かし、現代の社会で特に求められている人材としての素養を身につけつつあると言えます。

参考資料：栗津俊二氏（実践女子大学人間社会学部教授）：「日本企業はどのような人材を求めているのかーPROGテスト項目へのあてはめー」, 実践女子大学人間社会学部紀要第15集, (2019)

コンピテンシー領域は、下表のような構成要素からなっており、テストによって「経験を積むことで身についた行動特性を測定できる」と言われています。環境に実践的に働きかけ対処できる能力であるといえます。

コンピテンシー領域の構成要素

3つの力	9つの要素	33の詳細要素
対人基礎力	親和力	親しみやすさ
		気配り
		対人興味 共感・受容
		多様性理解
		人脈形成
		信頼構築
	協働力	役割理解 ・連携行動
		情報共有
		相互支援
		相談・指導・ 他者の動機づけ
	統率力	話し合う
		意見を主張する
		建設的・ 創造的な討議
対自己基礎力	感情制御力	意見の調整、交渉、 説得
		セルフ アウェアネス
		ストレス コーピング
		ストレス マネジメント
	自信創出力	独自性理解
		自己効力感／ 楽観性
		学習視点・機会 による自己変革
	行動持続力	主体的行動
		完遂
		良い行動の習慣化
対課題基礎力	課題発見力	情報収集
		本質理解
		原因追究
	計画立案力	目標設定
		シナリオ構築
		計画評価
		リスク分析
	実践力	実践行動
		修正／調整
		検証／改善

●リテラシーおよびコンピテンシーが向上した理由

今回のPROGテストで、1年次から3年次にリテラシーおよびコンピテンシーの両方に成長がみられたグループは、学生生活の満足度調査で「充実している」と答えている割合が高い傾向がみられ、以下のようなコメントを寄せています。

- 教員と学生間あるいは学生同士の距離が近く、教員から細かな指導を受けることができるとともに、同じ志を持った学生ともつながりを持つことが出来るため。
- 九段下という地理上の関係で資料収集や歴史探索などについても不足はなく、そういった意味でも非常に充実していると思う。
- 一年次から学校をつまらないと感じたことはなく、常に活動する機会があるため、充実していると感じる。一年次の時の基礎ゼミナールで出会った友人は今でも交流があり、三年次で始まったゼミナールⅠでは、教員との距離が近くなった。大学生活を通して自分が学びたいことを学び、深めることができているとともに、様々な人とのつながりも持つことができた。
- 学びたいと思っていたことが大学で出来ているから。
- オンラインになったとはいえ、それはそれでパソコンを扱う技能が向上したと思う。
- 新型コロナウイルスにより思ったような学生生活は送っていないものの、その中でも大学側の工夫によりまあまあ充実した学生生活を送れている。

自由記述から抽出された意見をみると、困難があっても前向きな姿勢で学生生活を送っている姿が浮かび上がります。対面授業が徐々に開始されてきたことや、ゼミナールなどの少人数制の授業での出会い、交流、学びを通して充実感を感じる場合が多いことがわかりました。人との交流を通して『親和力』にみられる「親しみやすさ」「気配り」「多様性理解」などの能力、ゼミナールを通しての学びで「情報収集力」「本質理解」「原因究明」などの能力を磨くという、教員や友人と切磋琢磨する環境が、これらの能力の強化に寄与していると考えられます。

2022度からは新型コロナウイルスの感染予防に最大限配慮しながら、原則対面で授業を実施しています。より一層の成長を期待しています。

【二松学舎憲章】

<建学の精神の発揚>

- ・教職員は、建学の精神「東洋の精神による人格の陶冶」、「己ヲ修メ人ヲ治メ一世ニ有用ナル人物ヲ養成ス」の発揚に努めます。

<教育・研究の目標達成>

- ・人材育成のため、自らその体现者となるべく、自己研鑽に努めます。
- ・法令及び学則を順守し、道徳心と倫理観を持ち、職務に当たります。
- ・現状を把握し、自ら課題を見つけ、教育・研究の質の向上に努めます。

<学生生徒支援>

- ・教職員一人一人が、学生生徒の人格と人権を尊重します。
- ・教育・研究の充実に常に努め、教育・研究環境の整備を行い、学生生徒の満足度向上を目指します。

<社会貢献>

- ・教育・研究活動を通じて、地域社会への貢献に努めます。
- ・社会情勢に常に目を向け、国際社会と世界平和に寄与します。

【発行主体】

二松学舎大学

大学改革推進部 I R推進室

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16

TEL (03)3261-1285

FAX (03)3261-7413

[E-mail] gakumu@nishogakusha-u.ac.jp

2022年7月31日発行